

浄土



1973
9

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(郵政大臣)授受承認(第三二五号)
昭和四十八年八月二十五日印刷 昭和四十八年九月一日発行

第三二五号 第九号



九
月
号

—目 次—

表紙『彼岸花』松涛達文画

〈彼岸法話〉 明日への道	服 部 光 喜.....	(2)
● 念仏不滅	竹 中 信 常.....	(4)
自策自励の日々を一法語に導かれて	大 屋 瑞 彦.....	(8)
選択集講話⑧ 光明唯観念仏行者篇	榊 泰 純.....	(11)
南太平洋に散華した英霊よ安らかに〈下〉	山野井 貫 琇.....	(16)
念仏・人と歴史⑤ 捨世のひじり称念上人	平 祐 史.....	(20)
異僧真覚〈第十九回〉	柴 田 六五郎.....	(24)
霊場を訪ねて④ 京都金戒光明寺	兼 子 正 真.....	(28)
「道」 東山々麓への道	高 橋 良 和.....	(30)
浄土宗の国宝「三河大恩寺の三門」	佐々木 洋 之.....	(32)

「学生骨になりて念仏やうしなはんずらん」



このことばは法然上人の人の心の中にくいいるようなはげしいおことばである。

学生とは学問をする人ということであるが、上人の時代にあっても学問に専注して人間を忘れる人があったことをしめしている。

当時知恵第一であったという法然上人が仏教の学問に専注されなかった筈はない。御伝記を拝読してもよくわかることである。しかし上人は学問のための学問をされたのではない。御自分の生き方を真剣に考えて学問をされたのである。上人はまた念仏は観念ではないとも仰せられています。実践のない宗教はなく、また、人生でもない。現代は科学の中に人間が埋没していると言われる。学問の中でも科学の中でも人間が埋もれてしまつてはならない。いつも生き生きとした人間がなければなりません。人間の回復は昔も今も大切です。人生が生き生きしているところに宗教が生き生きと生きる。

真の人生が生きる。

(良)



〈彼岸法話〉

明日への道

服部光喜

(東京深川雲光院住職)

酷熱の暑さに輪をかけるかのように啼き続けた蟬にかわって、夕宵せまる庭先にすだく虫の大合唱が始まる頃、秋の彼岸会を迎えます。遠い昔よりお盆と共に、私たちの心の中に生き続けてきた彼岸会。お盆が亡き人びとを追慕し、供養する法会であるのに対し、彼岸会はそうしたことをふまえた上に、自己修養の期間として、また日々の生活の反省期間としての、絶好の法会と申せましょう。

ひととは意識する与否にかかわらず、生きることや物欲・性欲などさまざまなものに対する執着心をもっている。それがために悩み、怒り、悲しみなどの「苦」にさいなまれた生活之余儀なくされ、時として犯してはならない罪を犯し、遂

には他人を殺めることさえあります。このような苦に満ちた世の中である限りひとは救われません。この苦の根源がいろいろなものに対する執着心からであるなら、その執着心Ⅱ煩惱Ⅱを断つことができれば、ひとが救われる道が開けます。

この救われる道の案内役として仏教では、さまざまのコースを設け、時処を選ばず、人びとを導びいてくれます。彼岸会はそうした中でも、私たちに身近かな、親しみある道のさえたるものといえましょう。

現在よくいわれている葬式仏教の名称を借りるまでもなく、仏教はその教えの広汎なるが故に、歪曲してとらえられ、未来永劫の幸せを願う宗教と理解されがちです。しかし

仏教の教えは、いま現に生活している私たちのあり方、方向づけを示してくれる教えを多く持ちあわせていることも事実です。ひとはそれぞれの目指す目標に向って、日々努力を続けていく訳ですが、今日のような生活環境の中にあっては、時間に追われ、周囲の惑いに負け、仲々その目標に到達し得ないのも、また厳然たる事実でありましょう。

今、こうした事実を考え合せた上で彼岸会を迎えます時、その期間がわずか一週間であったとしても、この間に培われた精神的な余裕が、この後の生活の中に大きな自信、ささえとなり、ゆとりある生活を過し得ると思います。

だが、ただ漠然と、またこの持つ意味合いを理解せず彼岸会を迎えたとしたならば、せつかくの好季も無に帰すでしょう。法句経にはこの彼岸について、

彼岸にいる者はすくなく

此岸にある人々は、

ただ岸にそいて走るのみ

私たちの目標とする理想の世界、彼岸に到達できるひとは少なく、ほとんどの人びとはその彼岸を目指しながらも、煩惱の濁流が渦巻く、こちら側の岸辺にそって走っているのみであります。悟し教えてあります。換言するならば、私たちのもつさまざまな煩惱を断ち切ったところに自づから彼岸

に到り得る道がひらけるといふのです。つまり前述しました私たちのもつ執着心を断つことによって、その理想世界が実現することになるのですが、これはひと本来の性質、本性を考えます時、まことに至難なことに申せましょう。

こうした私たちの日頃の生活を、より充実したものとするため、理想の世界実現のための指針として、彼岸会には六つの実践行（六波羅蜜）を勧めております。①めぐみの心（布施）で平和で和やかな生活を願ひ、②つつしむ心（持戒）で日頃の生活を反省し、③しのぶ心（忍辱）でいまだる生命の大切さを知り、④はげみの心（精進）で日々努力をかさね、⑤しずけき心（知恵）で人間としての道理をわきまえ、⑥さとの心（禪定）で感謝のまごころをささげる、そこに自づとみのり多い豊かな人生が開けることになるかと教えております。

私たちの生きていく、この社会を、この国をより住みよい、生きやすい環境とするためには、その中に属する私たち一人一人が、生きることの意味を把握し、律することによってこそ、実現できるのです。執着心＝煩惱Ⅱを追いかけて続ける限り、真の幸福はあり得ません。

今、彼岸会を迎えるに当り、心ならずもくり返した日々への行いの反省と、その上にたつ明日への努力を誓う、心静かなひと時をすごしたいと思ひます。



念仏不滅

竹中信常

(大正大学教授・文博)

二二

記憶に新しいことである。

古来、名僧知識にして長寿を得られた方には奇瑞が多い。永年、念仏称名の功が積ると、舌骨が焼けずに残るなどといわれる。

今夏、仏教保育研修会の招きを機会に、小樽の天上寺に参拝した。現在石上博応師の精進で域内はさすがしく整備清掃され、三十度を越す炎暑にもかかわらず、裏山からおろす緑風は汗を忘れさせてくれた。

長野の善光寺の御本尊と並ぶ一光三尊の阿弥陀如来、御自慢の十六羅漢像など順次参拝したのち、位牌堂に安置されている先代の木像の台下からガラス張りのケースを取り出された石上師は、その中に真綿を敷いて収められている不思議に

知恩院第七十九世で浄土宗の管長であった山下現有貌下は百三歳の長寿だった。現在は医学の進歩のおかげで平均寿命が伸びたといわれるが、それでも百歳を越す人は滅多にない。それが今から四十年も前の昭和の初期に、百三歳の長寿を完うされたのだから立派である。宗門には長命の方が多い。増上寺の前法主椎尾弁匡貌下は九十六だったし、現法主大野法道大僧正は九十歳になられた。函館の称名寺について北海道開拓時代に浄土宗の名を高からしめた小樽の天上寺の先代石上皆応師も、百四歳の天寿を完うされたことは、まだ



ついで説明された。

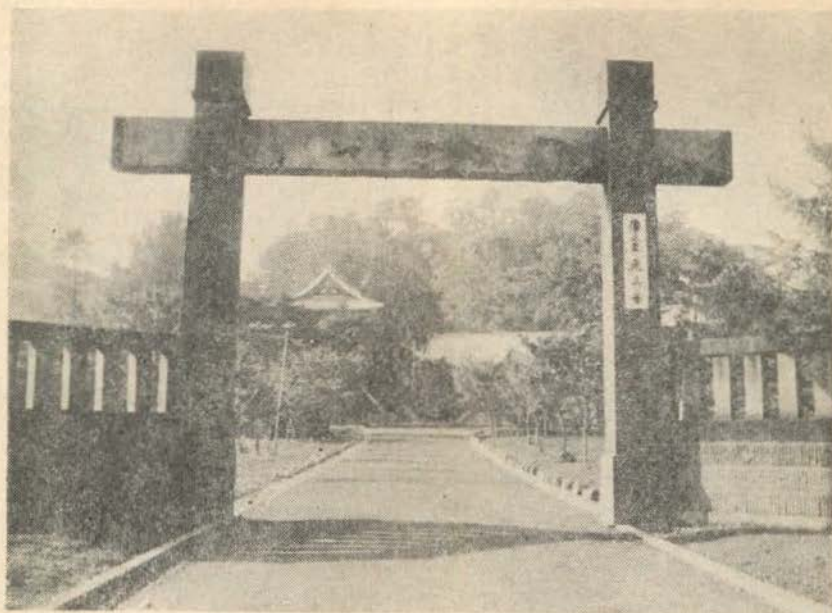
先代皆応老師は北海の地に念仏を弘めること一世紀になんなんとし、その間数寺を創建し、浄土宗の教勢を大いに強められた。一方、浄土宗の奥義を伝える伝書の研究に専念され、教学の興隆にも尽くされたとのことである。臨終に際し、お棺の中にこれら巻物を取め遺骸と共に茶毘に附したところ、不思議なことに伝書の部分が真赤な火の玉となって赤々と燃え、それが灰にならずに固まって、現に、ケースの中におさめられているのである。よくみると、巻物の軸とそれを取り巻く紙が化石のようになっていっているのである。

——現代的な感覚からするなら、これも一種の化学変化の結果であって、別に不思議ではないだろう。しかしそれは事実の説明にすぎない。普通なら当然灰になるべき伝書の巻物が、それではなぜそのような化学変化をおこしたのか。これは現代の科学といえども再現はできない。科学は結果論であって、原因論ではない。そこに不思議がある。その不思議とは「念仏の功德」である。永年の念仏信仰の凝り成されたものと信ずる。念仏は火にも焼けず、水にも流されないのである。

==

最近のベストセラーに『日本沈没』という科学小説がある。聞くところによると著者の小松左京氏はこの小説を書くために、十年間、地質学、地球物理学、地震学——その他必要な学問の勉強と構想に費したとのことである。

一口に一九〇万部というが、東京一千万の人口からいえば五人に一人が読んだことになる。大変なものである。なるほど、著者の勉強と苦心からすればそれもまた当然かもしれない。しかし、一方からすると、最近しきりに地震があり、天候も異常であり、動植物にも異変があらわれ、七月末の時ならぬのに赤トンボが群れをなして飛んだりする。公害ばかり



小樽天上寺山門

でなく何か変事が起りそうな不安が、人びとの心の奥に蠕蠕わだかまっている。西欧では一時代を百年目毎に区切って「世紀」と呼んでいる。今年は一九七三年。あと二十七年で二十一世紀となる。まさに二十世紀の終り、つまり「世紀末」にさしかかったわけである。世紀が変わるということはすべてが大きく変えることに通ずる。いわば二十世紀が没落することを意味する。すでに五十年ほど前に、ドイツの哲学者シュブランガーは『西洋の没落』という本を書いて、ヨーロッパ文明の没落と解体をとらえた。またキリスト教界では最近「終末論」が再燃し、人間の不信と傲慢のために世界の破滅が来るという神学思想が再検討されている。わたしたちの身辺を見まわしても、公害問題をはじめとして、嬰兒殺、老人問題、物価変動、政情不安、自然破壊など、何か、すべてのものが極限にきて、行きつまっていく感じがしてならない。

仏教にも「劫末」の思想がある。一劫とは四十里立方の岩を、天人が三年に一回降りて来て、天衣で軽く撫でて行く。そして、その岩がすりへって無くなるまでの期間で、一小劫という。岩が百二十里立方の場合を一大劫という。とにかく気の遠くなるような長い時間だが、いづれにしてもこの世には終末があるというのである。世界に「始め」がある限り、必らず「終り」もあるのである。「すべてのものはうつりか

わり、すべてのものには実体はない」という仏教の真理をあらわしているのである。

劫末はあるにしても、まだまだ大丈夫。百二十里立方の岩がすり切れるのはまだ無限に近い先のことだ。そう考えるのはとんでもないまちがいだ。劫末は単なる時間の問題ではない。終末は未来にあるのではない。それは人間の心の中で、すでにもう始まっているのである。現在を「行きつまり」と感じる心の中に、劫末も終末も存在するのである。『日本沈没が』売れて売れて仕ようがないのは、現代の日本人の心の中で、すでに日本が「沈没」しはじめているからにほかならない。

三

法然上人の御法語『一紙小消息』は

「末代の衆生を往生極楽の機にあててみるに……」
というコトバで始まっている。その冒頭の「末代」とはまさに「現代」にほかならない。

仏教が正しく伝えられた正法の時代、内容は伴わぬにしても形だけでも伝えられた像法の時代をすぎて、現在は内容も形も衰えて、わずかに名のみ残っている末法の時代とされ

る。そしてこれは仏教のみでなく、人類の全文明が崩壊の危機に当面しているのである。名実共に今や「世紀末」であり、「末世末法」の時代なのである。「信仰不在の仏教」といわれるのも故なしとしない。

そのような時代にこそ、阿弥陀仏の本願である称名念仏は輝きを増すのだと、法然上人は教えられている。

「将来、仏の教えがすべて滅尽しても、我れ慈悲を以って衆生をあわれみ、念仏称名の教えを説いたこの経だけは滅尽せずにとどめて、大衆がこの経を読んで仏道を成ずることのできるようにしよう」

無量寿経というお経の中で阿弥陀如来はおっしゃっている。法然上人はこの如来の教えを特にとり立てて、この濁悪末法の現世に生きるわれわれのために、念仏の教えが永久に人生の指針、信仰の炬火として輝きつづけることを論ざれているのである。

念仏の功德が水火にかかわらず不滅であることの証拠を、天上寺の「焼けずの巻物」に見て、しみじみと実感したのである。——この混乱の乱世をのり切る道、それは末法万年の後にいたるまでその光輝を失わぬ「念仏の大直」以外にないことを。

自策自励の日々を

—法語に導かれて—

大屋 瑞彦

(青森教区大善寺住職)

極楽は 是るけきほどとききしかど
つとめて至るところなりけり

日本人は狭い国土の中でひしめき合いながらも生きんがためにみんな働いている。

日本は国力を回復するため生産第一主義をとり、またたく間のうちに世界経済を支配する主役を演ずるようになった。しかし、その結果、エコノミックアニマルといわれ、その批判も厳しく、遂に日本をしめ出す動きまでに発展したことは言う迄もないことである。

一方国内では、政府が金を出して、米を作

らないことを奨励し、農民は土地をはなれ、出稼ぎという名のサラリーマンになったり、土地ブームにのった人達は遂に身をくずし家庭の悲劇を生むにいたった実例は決して少なくない。又、週休二日制とか、日曜・祝日が重なった時は翌日は休めと、全く働らないことをすすめているような状態です。

マスコミはどうだろう。相もかわらず、セックスオンリーで、その情報はもはや慢性化し、行きつくところまでいかないことにはどうにもならないような始末である。

更に乱れとぶ世界の情報に人心は附和雷同

し、人間もスポイルされ、自信は喪失。無意識的、無批判的、利那的にとり入れられるうすっぱらな知識はいつの間にか、その人間の人格形成にまで影響しはじめている。又、最近の異常な物価高は国民の日常生活そのものに対する不安感、焦燥感をあおり、今や物心両面の危機感をもたざるを得ない現状である。

そんなある日、法然上人のこの御歌を思い出した。特に「つとめて至るところなりけり」というお言葉である。何んと「重く」鋭く」そして「思いやりのある」ことばであろうか。

少し横道であるが、実はこの「つとめ」とをいうことばについてである。

お坊さんの毎日の勤行のことを「おつとめ」といい、又皆さんが、どこかへ勤務していることを「おつとめしている」という。

よくこんな会話を耳にする。

「もう一ぱいいかがですか」

「いや、あすも又、つとめがありますか

ら」

「奥さんもおつとめしたそうですね」

「生活のためですからね、仕方ありませんよ」

「つとめをかえたいと思っています」

そのほかいろいろな使い方はあると思う。

（遊女などつとめをおえて、義務を果たして）

勤行の場合の一つの修行とか、経を読むという形で表されているのに対し、後者は生活を裏づける経済との関連で表現されていると思う。

「つとめる」ことが生活のためであっても別に不思議なことではないが、生活においまわされ、無目的に、義務的に、他発的に動くものであれば、そこには何らうるおいがないものになってしまう。もっと自主的に主体的に生きる尊さに気づき生かされている喜びを味わいながら、よろこび働き、つとめるものでなければならぬと思う。いつの頃から使われていたかはわからないが、少くとも職業に対する考え方、とらえ方は、そんなところ

にあつたのではないだろうか。このことばのもつ感覚はすばらしいと思う。私は現代人はもつと「ことばを大事にし」「ことばの感覚をみがかなければならない」と思うのである。

近頃「家庭には対話が必要だ」と、確かに親子夫婦など対話の必要性はわかるが、もつと根源的なことは、その底を流れることばの感覚をみがけということだと思う。不用意な親のことばの乱れは、子供の心を乱し、思考をゆがめ、家庭までくずすことのあることをわすれてはならない。言葉は人格を作り、人からは言葉をうんでいく。「カッコいい」とか「ナンセンス」とか最近「三分間じつとガマンの子である」等、この言葉には思想がない。これでガマンの子ができるものではないのである。これは単に流行語だからといって一笑にふすことはできない。情報化がすすむほど画一化された人間ができていくが、無限の創造性を育てるためにこそ、ことばの感覚はみがかなければならないと思う。

極楽は吾々にとって理想・彼岸の世界である。阿弥陀経には「これより西方十万億土の仏土をすぎて世界あり、名づけて極楽という」とあり、観無量寿経には「汝知るやいなや、阿弥陀仏ここをさること遠からず」とある。遠いあの近いあの表現の仕方はいろいろあると思うが、法然上人は「つとめていたるところなりけり」と一ことで、明白に仰せられた。浄土宗を半自力半他力と、いかにも中途半ばな印象でいう人もあるようだが、この御歌の御心をじっくり考えて頂く必要がある。「つとめて、至る」とは、一声でもお念仏を申して至るということである。何事につけても「つとめず」して効果を最大にねらうのが昨今の世の中であるが、当時においても、一声のお念仏を申さず、最大の果を願う人々もあつたことを考えると、この言葉のもつ感覚は実に偉大である。開八をむかえ一枚起請文の「智者のふるまいをせずして唯一向に念仏すべし」のおことばを、今一度みんなでかみしめてみようではないか。

選釋集講話

第七章

光明唯摂念仏行者篇



榊 泰 純

(大正大学専任講師)

『選釈集』のお話も、いよいよ第七章段に入りました。本章からは、浄土三部經のうち、『觀無量壽經』の經文を引用して、本願念仏の主張を明らかにされてゆきます。本章は「弥陀の光明余行の者を照したまはす唯念仏の行者を摂取したまふの文」と題されています。この意味は阿弥陀仏の大きな慈悲は、すべての衆生をおおい尽しているけれど、特に阿弥陀仏の本願を信じている念仏の行者は摂取されるが、他の行を修している者には光り照さない、という意味であります。どうして、阿弥陀仏は、念仏する者だけを照されるのでしょうか、また念

仏とはどういうものなのでしょうか、法然上人の論証されておられるのに従って、話を進めてまいりましょう。まず始めに『觀無量壽經』の有名な文章を抜き出しておられます。

「無量壽仏に八万四千の相あり。一一の相に、おのの八万四千の隨形好あり。一一の好に、また八万四千の光明あり。一一の光明、あまねく十方の世界を照して、念仏の衆生を摂取して捨てたまはず。」

これは、阿弥陀仏のお姿を自分の心の中に描く方法を説いた「仏身観」文の一節なのですが、ここで重要なことは、文中の「念仏の衆生」を「仏を観念する者」という意味にとらずに、善導大師のお考えによって、「称名念仏する者」ととられている点です。なぜかというところ、『無量寿経』にある第十二願、「たとい、われ仏となるを得るとき、光明、よく限量ありて、下、百千億那由他の諸仏の国を照さざるに至らば、正覚を取らじ。」というのと、第十八願、「たとい、われ仏となるを得るとき、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生れんと欲して、乃至十念せん、もし、生れずんば、正覚を取らじ。ただ、五逆への罪を犯すものと正法を誹謗するものを除かん。」という二つの願から、阿弥陀仏の本願に合った念仏は「称名念仏」でなければならぬとされた。

そこで、法然上人は、この観經の文に続けて、善導大師の書かれた『観經疏』の中から「定善義」を説かれた文章を引用しておられます。

「諸經の中、処処に広く念仏の功能を讀す。無量寿經の四十八願の中の如き、唯専ら弥陀の名号を念じて、生ずることを得と明す。又弥陀經の中の如き、一日七日専

ら弥陀の名号を念じて生ずることを得。また十方恒沙の諸仏、虚しからずと証誠したまふ。又この經の定散の文の中に、唯専ら名号を念じて生ずることを得と標す。この例一にあらず。」

このように『無量寿経』にも『阿弥陀經』にも、また『観無量寿経』の中にも、「弥陀の名号を念ずる」、即ち「南無阿弥陀仏」という称名念仏による例が明らかにされています。また、善導大師は、同じところで、次のような自問自答をなさっておられます。

「問ふて曰はく、つぶさに衆行を修して、ただよく廻向すれば、皆往生を得。何をもってか、仏光あまねく照らすに、唯念仏の者のみを摂する、なに意ありや。」

答へて曰はく、これに三義あり。一に親縁を明す。衆生、行を起して、口、常に仏を称すれば、仏即ちこれを見聞きたまふ。身、常に仏を礼敬すれば、仏即ちこれを見たまふ。心、常に仏を念ずれば、仏即ちこれを知りたまふ。衆生、仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまふ。彼此の三業あまた捨離せず。故に親縁となづく。二に近縁を明す。衆生、仏を見たてまつらんと願すれば、

仏即ち念に應じて、目前に現在したまふ。故に近縁となづく。三に増上縁を明す。衆生称念すれば、即ち多劫の罪を除く、命終らんと欲する時、仏聖衆とともに自ら来りて迎接したまふ。諸邪業繫、よく礙ふる者なし。故に増上縁となづく。自余の衆行も、これ善となづくと雖も、若し念仏に比すれば、全く比較にあらず。」

ここには、仏の光明は総てのものを照らすといひながら、念仏行者のみがどうして摂取されるか、という矛盾する命題を提示されています。それに対して、仏と念仏行者との間に、親縁、近縁、増上縁という三つの深い因縁のあることを明らかにされています。それが、念仏行者のみが摂取される理由だということです。

親縁——衆生が仏の本願を信じて口に南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と称え、仏はその声をお聞きになられる。衆生が身をもって仏を礼拝し敬まうと、仏はこれをご覧になられる。衆生が心に仏を念ずると、仏はこれをお知りになられる。衆生が仏を憶い念ずると、仏もその衆生を憶い念じられる、このように阿弥陀仏と衆生、念仏行者とが結合する親しい関係にある、ということです。

近縁——衆生が念仏して仏にお目にかかりたいと念願

すれば、仏は目の前に現に存在なさるといふ、距離的に密接な関係にあるのです。

増上縁——親縁、近縁以外のすべての関係を内包するものです。衆生は阿弥陀仏を称念すると、現在までに造った罪は除かれてしまい、命の終ろうとする時に、仏菩薩の来迎を受けて極楽へ摂取して下さる、ということです。

このような縁があるから、仏は念仏行者を摂取して下さる、と善導大師は説かれたことを、法然上人は、私たちにお知らせ下さいました。

さらに、上人は『観念法門』の次の文章を引例しておられます。

「又前の如く、身相等の光、一一遍く十方世界を照すに、ただもつばら阿弥陀仏を念ずる衆生のみあつて、彼の仏の心光、常にこの人を照して、摂護して捨てたまはず。総て余の雑業の行者を、照摂することを論ぜず。」

この善導大師の『観経』の真身観文を要約されたお言葉を引いて、念仏行者のみを摂取される証拠とされたのです。

このように『観経』とその注釈の文を証拠としてあげ

られて、これらの文章の解明を、法然上人は次のようになさっておられます。

「私に問ふて曰はく、仏の光明、唯念仏の者のみを照して、余行の者を照さざるは、ない意^{ミナ}ありや。

答へて曰はく、解するに二義あり、一には親縁等の三義、文のごとし。二には本願の義、謂はく余行は本願にあらず。故にこれを照摂せず。念仏はこれ本願なり。故にこれを照摂す。故に善導和尚の六時礼讃に云はく、『弥陀の身色は金山の如し。相好の光明十方を照らす。唯念仏のみありて、光摂を蒙る。まさに知るべし、本願最も強しとす。已上』

又引く所の文の中に、自余の衆善は、これ善となづくとも雖も、若し念仏に比すれば、全く比校にあらずるなりといふは、意の云はく、これ浄土門の諸行に約して比論する所なり。念仏は、これ既に二百一十億の中の、選取る所の妙行なり。諸行はこれ既に二百一十億の中に、選捨する所の施行^{しぎやう}なり。故に全く比校にあらずと云ふ。又念仏はこれ本願の行、諸行はこれ本願にあらず。故に全く比校にあらずといふなり。」

ここで法然上人のおっしゃりたいことは、念仏は本願の行であり、余行は本願の行ではない、だから念仏の行者は阿弥陀仏の光に照されて摂取されるのだ、という点でしょう。『観経』の文のところで引用した第十二願、第十八願などによっているのでしょうか。

もう一つ、この解明されている中で重要なことは、選取・選捨ということです。まず念仏を含めた一百一十億の善行を認めた上で、念仏はそこから選取した妙行であり、他の諸行は選捨した粗雑な行である、という点です。現在の判断の基準は、善か悪、良か否というように成りがちです。どちらか一方に決めてしまうと、他は全部否定されてしまいます。しかし、法然上人は、そのようなことはなさいません。いろいろな行を善と認められた中から、念仏は本願の行だから選取り、他は本願の行ではないから選り捨てられるのだ、という姿勢を取っておられます。人は頭から否定されれば反発するでしょうが、一応、今までのことは認められ、それよりも、これこれだから念仏しなさいよ、というように説得されてゆくと、そこから異った人間関係が生まれて来ましょう。ここに、法然上人の宗教家としてのユニークさがあったのではないのでしょうか。自分の信じているものを、他の

人に伝えようとするには、このような上人の態度は、いろいろな考え方や性格のある多くの人に対して、大変よかったのでありましようか。

本章を結ぶにあたって、もう一度、全体を振り返って、問題点や強調されているところをまとめておきましよう。

1 例証としてあげられた『観経』の文中の「念仏」は、「観想念仏」でありそうなるものを、他の経論から「称名念仏」なのだ、ということ。このことは、もう一度、お互いに考えておきたいことです。

2 念仏は阿弥陀仏の本願による行であるということ。

3 本願の行であるから、諸善の中から、念仏は選取され、諸行は選捨されるべきものである、ということ。

4 だから、念仏行者のみが阿弥陀仏の光明に照され、摂取されるのだ、ということ。

このような「念仏」を行なう者の持たなければならぬ心については、次章の浄土三心篇に詳述されています。次の方に、バトン・タッチいたしましょう。

施本

『ひがん会』

価一五円

秋季号

B6変型・表紙共 一二頁

送料実費・二百部以上一三円

◇ひがん会は、わたくしたちに、真実の生き方をおしえ、豊かな心を養いそだててくれます。

◇遠い昔からわたくしたちの心にかよう行事を通して、ゆかしい心持ちを育てたいものです。

◇ひがん会についてのやさしい解説の施本としておすすめいたします。

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

電話東京(〇三)二六二―五九四四

◎ご用のむきは早目にお申込み下さい。

Ⅱ 第16回南太平洋戦没者慰霊団に参加してⅡ

南太平洋に散華した英霊よ安らかに 〈下〉

長野市常然寺住職

山野井貫琇

水曜島の巻

四月十九日(木) 今日の水曜島行きである。昨日同様日の丸を船首になびかせて意気高し。昨日の夏島行きと違って遙かの彼方、天気は快晴だが風強く波もまた荒い。左に秋島・楓島そして桜島・星島を望み、右に前島・月・火曜の島々を十分に満喫し、月曜島沿岸には昔の退避壕の口が数多く、処々に白いかもめの群れが更にわれわれの目を楽しませてくれた。途中海上慰霊も執り行ないながら二時間後の十時には水曜島フアーソン栈橋に到着した。向うから島民子供たちの喊声が開いてきたが、それはフアーソンスクールの運動応援の平和な声であった。アメリカ人の教師がたった一人校舎の

傍らで数人の子供たちと観戦。この教師にサインを頼むと左手でダンヒンクスと書き子供たちと共に写真にも心よく応じてくれた。グラウンドとはいえ草原の周りには十数名くらいのグループが草の上に木材の上に腰をおろしてやんやの声援、これが各級なのであろう。突然その前に立った私は三十年前の「ヤツキロウウター……」を歌ったところ、喜んだのはこの子たち。各人は手拍子をうち身体まで左右に振って、次から次のグループへと歌の一大合唱となった。人種は異なっても歌はいい。私はわれを忘れて一生懸命に歌う。団員一同もまた果然とこれをみつめていたようだった。歌い終って日本語訳を聞いたが、問う私の言葉は一片すら通じなく苦笑していたのである。

やがて島民ロートは昔墓地があったという近くの小さな平



潮風を受けて水曜島の慰霊祭

地、これは相沢氏の土地というところへ案内してくれた。この広場の中央に今日もまた持参の塔婆を建立、供物を捧げて、一時間にわたる法会を執行した。導師を勤めた私の声も長野県知事弔慰文代読にあたっては、さすがに感激その声も絶え絶えであった。続いて川元師も着衣読経をなされた。終了後は法要中もの言いだけに見物していた島民の老婆が近づいてきた。私は「お前さんは日本語知っているかな」と聞いたところ「エエ、シュコシネ」とはね返った。名はフサエ、年は四十八歳という。向こうの教会の庭で戦争中の若かりし頃、日本の兵隊さんと踊ったとわれわれ補給中隊のものとの宿

舎を指した。更めてフサエの顔をみ直して懐かしく話は進み、思い出の島民歌「ヤッキロウロウター」は「出た出た月が丸い丸い……」であり、「マタオマナガエネオ……」は「はとほっぽ」そして「ネカパー……」は「東京音頭」であることも話してくれた。私はみやげ話が一つふえて嬉しかった。また新聞を賑わした戦没事件のことも数人と語ってくれた。それが因みに慰霊法要としたこの広場であったとは。

午後は今日海上波荒きため早々に帰ることになったが、団の了解のもと一時間の猶予を乞うて松本の上条氏とツキアル村に行った。ここはわが隊の最初の犠牲者青木初治君と赤瀬清作君との戦没場所である。近くの家から珍らしげに出てくれた女性イレラ（四十五歳）の一族の一人もその時ここで死んだのだと、繰り返す談話のうちに判明した。わずかの線香を手向け、帰りにはその宿舎、トタン屋根にコンクリート、金網の窓に荒れた懐かしの家を手でなでながら帰路についたのであった。

帰省とまとめ

四月二十日（金）今日は午前のみがようやく自由行動のとれる日。富山の柴田氏から事前の依頼もあったので、同県福



大任を果たした団員一同〈春島コンチネンタルホテル前にて〉

岡町大野静江さんのお伴をすることにし、数人の一行はタクシー（とはいえ軽トラック車）を頼んだ。大野さんの夫は戦事中この春島乙女峠を流れる川の中腹で亡くなったという。しばらくしてタクシーは来たがスコールのさ中、ようやく発車はしたがこのスコールの断続にいささか閉口。途中数回の下車退避を余儀なくせられた。迷いながらの一同は支庁の向う、川の流れを遡ってジャングルの中にそれらしい処を決めたのである。大野さんはここがわが夫の鎮まる所かと、さっそく持参の紅白の重ね餅に水・タバコ・香花を供えて涙ながら幽冥の夫君と対面した。心から祈る合掌の姿、まことに痛ましく、折からの重米するスコールにびしょぬれになりながらも尚も祈り続ける敬虔な姿、時の経つのも忘れて見守っていた。

午後は三泊もしたコンチネンタルホテルにも別れを告げなければならぬ。米人の管理人も名残り惜しうに玄関まで見送ってくれる。何かと四日間便宜を与えてくれたマイクロバスに思いを残し、運転の島民ヨシミは愛相がいよいよ。棧橋までの車中最後というわけで歌を所望したところ、いきなり「伊那の勘太郎」さんの名調子、そして東京音頭・同期の桜・果ては「勝ってくるぞ」まで次々と日本人顔負けの歌。その昔は日本軍のコンパニーとして共に働いてくれた

という親日家である。道行く島民たちも手を上げて「コンニチワ」と大きな声であいさつをしてくれる。車上と路上の「コンニチワ」の交歓も全くほほえましく旅情を深めて去りがたくなる。空港では従業員に森氏の弟もいて税関では何かと親切に応援までしてくれる。また内地新潟県からトラック恋しさの余り自分の全財産を処分して単身渡島在住一か年余になるという、白井由衛氏も懐かしく見送りに来ている。四日間常に案内と世話をしてくれたトゲイコサム・木下佐津雄（漢字で自署する）・カニスロボン（これはコサムが代筆する）なども見送ってくれるのであるが、とくに佐津雄は離別の情に堪えず涙を流し日本まで行きたいと言う。慰めの言葉をかけるが「もう何も言ってくれな」と握りこぶしを目に当てて感慨無量。やがて午後二時三十分コンチネンタル機は出発した。トラック島よさようなら！戦没者の霊よ安かれと心から祈ったのである。

四月二十一日（土）は旅の最後の日である。グアムのクリフホテルを出発した大型バスは南部の島めぐりにその情緒を十分堪能させてくれた。

顧みて六日間の旅、出発までは子供のよう待ち遠しかった。旅中は毎日毎日が楽しく、そして感激の連続であった。参加者は皆それぞれの動機があり真剣であった。念珠・ろう

そく・線香はもちろん、菓子・水・たばこ・写真・葉書と故人が生前に愛した種々の品物を持参していた。戦没者慰霊の心に結ばれた団員は、それこそ兄弟姉妹のような気持ちで日々を行動した。さすがに一人の落伍者も病人もなく行動し、そろって訪島の使命を果たし無事帰国することができたことは、偏に阿弥陀如来の加護のもと戦没諸霊の守護によるものであり、中心から感謝と冥福を捧げるものであります。

彼岸の島は終戦後残留部隊員によりよく後始末がなされ、例えばガダルカナルやニューギニアなどのように山奥の洞窟に未だに当時の白骨が散見するという情景は一つもありません。壕やトーチカの跡は点在し、沿岸には船艦の赤さびた姿はわずかに見られますが、想像に増して平穏な島であり、往昔の戦没者は静かに肉親眷属の来島を待っていると感じられたのです。昔の阿鼻叫喚の巷はすっかり平和の島となり、椰子もパンの実もタロイモもパイヤも豊かに実っています。未踏のジャングル地帯もふえました。平和な原始の島となっています。どうぞ安心して今後訪島あらんことを願うものです。

最後にこの壮挙を計画された南太平洋戦没者慰霊協会と随行員梁田美也子さん並びに内外航空の飯干美邦氏に深甚の敬意と謝意を表して筆を止めます。



念仏人と歴史

捨世のひじり称念上人

平 祐 史

(仏教大学助教授)

一

東山知恩院の法然上人のご廟のほとりに、天文十七年

(一五四八)の暮に建ったばかりという一心院に称念上

人を訪ねてきた一人の武士があった。彼は下桂の里に住

む中路耆岐という郷土で、称念上人の徳風を慕う熱心な

念仏者であった。彼は上人の教化を受けて以来、是非と

も桂の地に上人を迎え、寺を建てたいと願っていたのだ

った。上人は快諾され、彼の館へおもむかれることにな

ったのである。時に天文十八年で、世はまさに国盗りの

時代であった。丁度この頃、美濃にあっては、斎藤道三

が武威を振い、松平廣忠の子竹千代(後の徳川家康)は

今川義元の人質となるというような時期で、宗教界にお
いては耶蘇会の宣教師ザビエルが鹿児島に上陸し布教を
始めるという時代にあたっていた。

こうした乱世の時代に信仰に心を寄せるというような
武士は少なかったなかで中路耆岐などという武士は稀な
在存であったろう。

桂の館に招かれた称念上人は、中路一族のために念仏
の安心浄土の用心をこまごまと説かれたのだった。かく
てその一族は大いに念仏の教えに歡喜し、その様子は上
人に対しまことに幼児が母を慕うが如くであったと伝え
ている。そして上人が逗留の間に、はやばやと斧や大工
道具をもった職人や人夫が多勢やってきて、日ならずし

て一字の仏堂を完成したのであった。上人はこの寺を極楽寺と命名されたのである。

ところが落慶入仏の日となったが、別段きらびやかな会式が営まれたということではなく、念仏ばかりのおつとめで、供養がなされたのだった。これを見たあるものが、「堂塔が建ったなら、その供養にはその宗の式法に準じて、散華や灑水梵唄啓白などがあって、本堂の莊嚴も美事にそなわり、百味五果の珍膳をととのえるのが本来なのに今日の落慶供養は何の莊嚴もなく、また何の式法もなく、ただ念仏ばかり唱えて供養したのは、本当に何も知らない無知の道心者だ。」とののしったのだった。

これを聞かれた称念上人は、

「まことに私は無知の道心者です。供養法事は、浄土宗の如来の本願ではありません。南無阿弥陀仏と唱えることこそ本願であって、念仏の一行は万徳の帰すところのもので、散華も奉請も灑水梵唄啓白の類もみな念仏の中にこもれるものです。」と話されたと言ふ。

また、上人は、さきに里瀬某の請に応じて洛北鞍馬の野中村に専称庵を草創されたが、のちに野中村の近在で誦経などするとこれは称念上人の意にそわな^{こころ}いから、只々念仏せよという在家が多かったと伝えている。

このように称念上人は、宗祖にかえってただひたすら念仏を唱えることのみを主張されたのだった。後世こうした上人の風儀を指して捨世義または捨世派と称したのである。それではなぜ称念上人のような捨世と呼ばれる念仏者が現れてきたのであろうか。

二

称念上人の出世した時世は、国盗りの野望にもえた戦国の武将たちが大いに活躍する時で、地方の乱れとともに京都の朝廷の衰微はまことに気の毒な状態であった。この頃の天皇は、御意のままにならぬことが多く、自然に仏教信仰に心を寄せられるようになり、とくに後花園・後土御門・後柏原・後奈良の歴代天皇は浄土宗に帰依されること厚く、浄土宗も有為の人材を輩出し、徐々に教団がととのえられようとするときであった。こうした時に皇室の奥深く出入りを許される宗侶も多数でるようになり、その功によって、おのづから香衣の綸旨を頂戴するものが多くなり、その例が多く重なる、われもわれもと出世を望む僧がふえるのはいつの時代でも変りはない。それがいきおい本末関係や座次・分限の問題とからみあい、次第に専修念仏の本来の姿を忘れ形式主義に

流れる傾向を示してきたのであった。

当時、このような形式主義の弊害からおこった事件に、知恩院と知恩寺が本末の紛争をおこしたことがあげられた。この事件は、かねてより知恩院と知恩寺の間に香衣の綸旨執奏をめぐる、本末関係が論じられ、激しい紛争が続いた。これに終止を打とうと大永三年（一五二五）ついに朝廷の勅裁を仰ぐことになったが、この勅裁がさらに問題に拍車をかけ、単に浄土一宗の問題に止まらなくなり、青蓮院の尊鎮法親王は勅裁を不服とされ、高野山へ隠遁されるというさわぎがおこり、叡山の山門大衆も勅宣の撤回を求めて強訴するという事態までひきおこしたのだった。

こうした形式主義の風潮を帯びてきた浄土宗のなかで、宗祖法然上人の「われはこれ鳥帽子も着ざる男なり」との精神に立ち帰り、専心に称名念仏を相統しようとする運動がおこってくるのは、当然のことであった。こうした運動の先駆者として、捨世の称念上人の念仏運動が展開されたのである。

三

称念上人は、永正十年（一五一三）武蔵国品川郷、藤

田左衛門尉道昭の子として誕生した。そうして大永元年（一五二一）増上寺第七世親譽上人のもとへ入室し、弟子となった。幼少で出家された理由については詳びらかではないが、この年の前年、即ち永正七年正月には、京都で土一揆が蜂起し、幕府は徳政令を発するということのような政治的混乱の時期で、後柏原天皇の即位式もままならず、踐祚以来二十二年目の大永元年にやっと即位の式をあげられるということであった。こうした時代の背景のなかで上人は出家の第一歩をしるされたのだった。

その後、下総国飯沼の弘経寺において修学し、十六年の研学を経て、武蔵国岩付の浄安寺に住持し、教化に専念されたわけであるが、このまま迎っておれば、自然とエリート僧として出世の道が開かれたものであろうが、称念上人には当時の仏教界の姿に耐えられないものがあった。それは前に述べた通り、出家でありながら出世を競望し、はてには形式主義に墮すあまり本来の出家社会の姿を見失うという危険があった。こうした姿を厭い名利から離れた真の出家の姿に立ち戻ろうとする求道の熱意が湧きおこってきたのである。そうして浄安寺を辞し、隠遁者としての出家を志ざし、江戸に天智庵を創建し、求道者としての生活を求められたのであった。

称念上人の第二の出家ともいへべき遁世は当時の出家社会に対する痛烈な批判からもたらされたというばかりでなく、むしろ宗祖法然上人の求道的精神を鑑として、浄土宗の念仏を法然上人の精神に立ち還って実践しようとする精神が大きく働いたものと思われる。云うまでもなく、法然上人は十八歳のとき、黒谷叡空上人のもとへ遁世された。法然上人の遁世もまた出家社会の形式主義や名聞利養を厭うことであつた。それゆえに、法然上人の専修念仏発生の基盤は、反形式主義の中から生れたものと云つてよいだろう。従つて、称念上人が宗祖をひたむきに慕い、専修念仏に徹しようとするならば、その帰結として、改めて捨世することによって、勇猛に念仏の行を実践せねばならなかつたのであらう。

称念上人は、天智庵に住することわずか三年、天文十三年（一五四四）の春、庵室を弟子にゆづつて、東海道を諸国脚行の旅に出られ、途中、伊勢大神宮に念仏弘通を祈請し、松坂の樹敬寺に留まり、大原問答などを講説し、参会の僧侶二千余人に及ぶと伝え、大いに念仏の弘通につとめられた。ここに留まること三年、天文十六年京都に入り、祖山知恩院に詣でて、七日間の通夜念仏のち、請われて鞍馬野中村に専称庵を建て念仏三昧の道

場とされたのだった。以降、上人の京都における教化はめざましく、上人の徳風を慕う道俗はひきもきらず、天文十七年（一五四八）には、知恩院の祖廟のほとりに一心院を建立され、宗祖の遺風の顕彰につめられたのである。上人は遁世以来その短かい生涯にもかかわらず四十七寺に及ぶ寺を建立された。それは上人の徳風を慕う名もなき信者の力に負うところが多かつた。かつての遁世者たちの多くは終始閑居して孤立的であつたが、称念上人は多くの念仏の同行衆をもつていた。そうして道場清規を定め、道場に参会する者は、皆同行者だといふことで何の差別もなく、真剣に念仏の一行に励んだのだった。また、上人は五条河原の頼人のために衣食を与えて教えを説いたが、上人の通られた道を称念路と呼んだといわれている。

称念上人の念仏の立場は従来の聖僧（おとし）のように反教団主義ではなく、教団の中にあつて、反形式主義であるが且つ念仏の実践主義をとつたところに新しい時代の捨世の意味があつたと云わねばならない。

上人の念仏実践運動は近世に至つても以八・弾誓・忍微・澄禪・無能・閑通などという人々にうけつがれて行つたのである。

曾東の里を後にした真覚が大和路を目指したことは疑う余地が無い。しかしやがて彼の終焉の地となる善住寺に再び姿をあらわす迄の十九年間の消息は否として知ることが出来ない。



異僧眞覚

第 19 回

—滋賀県近江八幡市在住—

柴田六五郎

文化九年七月二日、三井の寺で撞く鐘の音が暮れの六つを告げる黄昏時、真覚は瀬田の唐橋の西の袂に差しかった。



（何処までもついて来るといふ妙春を供なつて此の橋を渡つたのは早春の日暮れ時であつた。その夜善住寺を辞した妙春は恐らく此の橋から身を投げたのだ。それから……）二十年の歳月を隔てながら昨日の事のように鮮明な記憶を甦らせた真覚は、橋の中ほどで欄干に寄つて瞑目合掌した。

「清浄室妙春尼追善菩提」

と唱える声に和するかのような湖面を渡る三井の鐘の音であつた。

収獲間近の稲の穂波も、赤く熟れはじめた柿の実の色も、慌しい落日の残影にバツと映えて見る見る闇に沈んでゆき、ほの暗い行灯の火影が寺にほど近い喜八の家の破れ障子にゆらめいた。形ばかりの風呂敷包を振り分けにした真覚は錫杖をガチャツかせ乍ら小さな門をくぐつた。其の夜、夜を徹して称名念仏する伏せ鐘の音が静まり返つた部落に澄み渡つた。夜明けを待ち兼ねて集つた檀家の顔ぶれは随分變つていた。彼の不在中鬼籍に入つた者は二十一名だと言う。無断で寺をとり出して行方も知れなかつた真覚の突然の帰山を人々は当然の事として迎えた。

「俺が二十年留守にした為に此の寺も随分と荒れた。これはひとつ頑張つて復興せねばならぬ。永い間放つたらかしにしておいた本尊様へのお詫びに、何年かかっても俺一人でや

らせて貰うことにする」

「和尚さん。なんほこんな小寺でも修すとなりや相当な金高じや。一体なんぼ稼いできなかつた」

独力で修理すると言う和尚に、喜びと疑念の色を見せながら勘治郎が尋ねた。

「いや、別に金を稼いで来た訳ではない。今は一文無しじや。じゃがこれから毎日仏像を彫るのじや。仏様の絵も書くことにする。それを売るのはじや。売ると言うても値段は付けぬ。欲しい者に頒けてやるが、礼は氣持次第ということ。米五合でも麦一升でもよい。あなた委せじやそも南無阿弥陀仏ということがあなた委せということじやからな。金でも米でもよい。そいつを貯めておけば何時かは出来るじやろ」

「それではわしら檀家は一文も出さんでよいということですかいな」

甚三が一寸狡そうな笑いを口の端に浮かべて尋ねた。未だ六十を少し出たばかり、さして老人とも言えぬ歳であるが彼の顔は皺だらけである。その皺に只の三反しか持たぬ文字通りの水飲み百姓から、一代で一町歩近い略々一人前の百姓にのし上つて来た苦勞が刻み込まれていた。

「一文も要らぬ」

と答える和尚に

「それでは和尚さんに済まぬ。せめて三度の食事なと我等で進ぜよう」

と言いつ出した長老の勘治郎の意見に皆が賛成し、真覚はその日から檀家の夕食に呼ばれることとなった。十日に一度の当番制で夕食を供し、翌日の二食分は握り飯を作つて貰つた。(斯うすれば双方共手間が省けるから)と真覚が言つたのである。

真覚は、かつて如意輪観音いや妙春像を刻んだ内陣傍の四疊半を仕事場に当てた。秋の収穫と裏作の植付、目の廻る程の忙しさの後で迎えた正月に田舎の人々は長閑すぎる程の思ひであつた。寺参りを黠つてその実彼等には珍らしい彫り物を覗きに來ては真覚の仕事場に屯した。

「何とまあ早いことじゃ」

恰も木の中に潜んでいるものの形を掘り出すかのように、真覚のノミの先は器用に働く

「そりゃあ二十年も修業してござつたことじゃ。石の上にも三年ちうが、二十年も修業すりゃ一人前以上じゃ」

甚三がしたり顔で言う。

「和尚さん。それは何様だね」

「本尊様じゃ」

「本尊様？」

「此の寺の本尊阿弥陀様じゃ。あれ見い」
真覚は側の襖を開けた。

「膠がゆるんで御手はとれるし、足もとは虫が食うしボロボロじゃ。こうなると修繕も出来ぬから先づ本尊様から彫らして貰う」

「こりゃ有難い」

「何が有難いじゃ。仏像なんぞ、ちつとも有難くも何とも無いわい」

孫吉は仰天した。

「仏像は拜んで念仏を申せばまことの仏様となる。念仏申さずに、拜まずに、飾つとくだけなら人形も一緒じゃそんな人形なら俺は彫らん。どうじゃ、よう拜んで念仏申すかい？」

彼は来る日も来る日も仏像を彫つて倦まなかつた。釈迦三尊、三十三所観音、毘盧遮那仏、二寸三寸の小作ではあるが、仏菩薩の像は次々に誕生した。そのノミを振り乍ら彼は念仏を称えた。それは他人に聴きとれぬ位の低い声で、むしろ狂人の独語のように無気味でさへあつた。

△器用に仏像を彫る和尚の噂は忽ち近在に拡まつて、仏像の希望者や野次馬が寺に溢れた。中には清八と呼ばれた頃の幼な馴染もあつて何彼とその頃の想い出に話の花を咲かせ

うとした。が、周囲が賑かになるにつれて彼の孤独癖が頭を拾げた。

「斯う騒がしうては仕事にならん」

たまりかねた彼は黒々と墨書した木札を玄関に掲げた。

「下駄の齒形と長尻無用者也」

人々は呆れ返った。

「こりゃ何ちう勝手な和尚や。毎日飯は食いに來る、たまには風呂にも入れてやつてるのに。此の看板は一体何ちうこつちや。まあ仕事の邪魔になるで長居無用はよいとして、下駄の齒形無用とは何じや。わしらに寺に來るなちうこつちや。ほんならこつちも

『乞食無用』

と書いて家の戸口へ貼つたらか。おい喜六、お前んとこ今日の当番じゃ。門口へそう書いて貼っとけ」

喜六は飛んで帰ると、甚三に教えられた通り、金釘流でそれを書き入口の戸に貼りつけた。だが正直者の彼は、和尚と顔を合せる氣まずさを思うとやり切れなく、ブイと何処かへ姿をくらませてしまった。女房のおさくは、待てども一向に現れぬ和尚の姿を何度も戸口へ出てはうかがったが、遂に此の貼り紙を見つけた。烈火の如く怒ったおさくは取り敢えず和尚の夕食を寺へ運び、亭主の悪戯をくどくどと詫びて帰

った。その夜遅くフラリと帰つて來た喜六を掴まえた女房は、どえらい権幕で喰つてかかった。

「どうせお前のような間抜けの考えたこつちやない、又甚三奴に担がれたに決つとる。たとえ担がれたにせよ、和尚さんを乾干にするような奴には飯食わさんど。今日から食はさん。今度の炊き番まで十日の間乾干や」

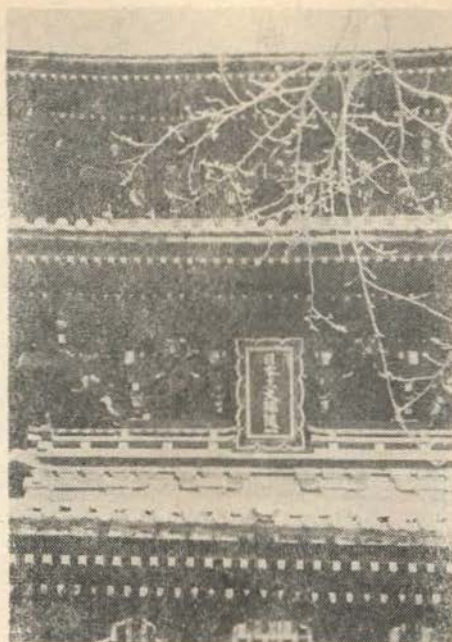
喜六のもたもたした弁解も更に聴き入れられずその夜は遂に絶食の憂き目に合った。その噂はすぐ檀家中に知れ渡り、お蔭で真寔は檀徒の抵抗を免れることとなった。

彼は彫り上げた仏像を本堂外陣の東の隅に棚を設けて祀つた。『諸仏殿』と自ら刻した扁額を掲げたその壇は祭壇であると共に陳列場でもあった。価は相手委せと云う商法ならぬ商法でも彼の手許は次第に潤うようになり、檀家の者も喜んだが

「和尚さん此の頃大部懷具合がよさそうじゃ、毎年九俵づつ集める齊米もガツチリ貯め込んでる。じゃが一向に寺の修理も何もせん。こりゃあの和尚、どえらい喰わせもんかも知れん。まるで商人や。いや商人以上や」

或る者は不満を洩らし、彼の人となりに疑惑の眼を向けはじめた。

霊場を訪ねて



第二十四番札所

京都黒谷 金戒光明寺

—— 兼 子 正 真 ——

金戒光明寺は、洛東北白河黒谷、大文字山の山すそ近くに広がるこんもりとした緑につつまれた丘の上にある。この黒谷金戒光明寺のことを、京都では「黒谷はん」と呼び「百万遍はん」とともに、法然上人の念仏寺院として市民に親しまれている。金戒光明寺の金戒とは、法然上人が、叡山元黒谷存住の折、伝教大師最澄（天台宗宗祖）より相伝の天台円頓戒の正統を叡空上人より襲承された。しかしながら法然上人は浄土立教開宗のため叡山を下りられた。そのため、この黒谷光明寺に円頓戒の正統がもたらされ、ここが円戒の一大中心地となったのである。そして、黒谷第八代運空上人が、後光厳天皇に御授戒された時、天皇より「金戒」の二字を賜ったことに起因している。

私は、京都に來た時、何度も遠くから、この黒谷の文殊塔をながめたことはある。しかし、今回はじめて、光明寺に詣でることができた。

寺の入口は、知恩院と同じく三門であった。この三門の前には、二十段ほどの石段があり、両側には松が茂り、大本山という格式の高さと、長い伝統を物語っているように感じら

れた。門の際にはやはり「浄土根元地」という石標があり、二層になった三門の正面高いところに「浄土真宗最初門」の勅額があり、後小松天皇の御宸翰である。浄土宗（現在は独立して黒谷浄土宗を形成）の寺院になぜ「浄土真宗」とあるのか。私には不可解な感じがするが、このことについては別の機会に調べてみたい。

門をくぐりぬけて、五〇メートルほど進むと、御影堂がある。がっしりとした中にも近代的な優雅さを秘める立派な建物である。その前で私は一人の老僧に出会った。私は、その老僧にあれこれ寺のことをたずねた。その話によると、この御影堂は昭和十九年に、当時京大名誉教授であった天沼博士の設計によるもので、昭和にできた最大の木造建築であり、後世に遺し置かんと悲願の下に造られたとのことであった。堂内は檜の香が残っているみたいに新しく明るい。知恩院の大殿の神秘的な暗さに対し、明るく躍動感のあふれるものである。戦後生まれの私にとって、ある種の共感を呼ぶ。内陣正面には、法然上人七十五歳念仏三昧親証の御影が奉安してあった。尊像一拝し、老僧の説明の中にあつた「紫雲石」を見ることにした。寺の裏山の墓地をかけ上ると、そこには何十万という墓標がたちならんでいた。紫雲石は、北西の端にある西雲院門内の小さな庵の中にあつた。大きさは、

縦一メートル、横一メートル五〇、高さ七、八十センチのな
んの変哲もない石である。しかし、寺伝によると、紫雲石は
次のように語られる。

今より八百年の昔、承安五年（一一七四）の春、法然上人
四十三歳の御時、釈迦弥陀二尊の大悲を悟り、念仏往生の教
門を見立て、他力本願の御法を勧めんが為に、叡山を下り
て、先ず真如堂に詣でて、本尊に祈願をささげ、当山山頭の
岩根にしほし身を休めて唱名念仏せられている折柄、紫雲た
なびき光明赫奕四辺を照らす靈相を感得し、「此所我が教化
有縁の地なり」と叫んで草庵を結ばれたとある。

私は、この紫雲石の前に立ち「此所ぞ我が教化有縁の地なり」と申されたおことが妙に頭にこびりついて離れなかつた。八百年の昔、苦悩の日々より脱し、この石の上で、これからこの日の本の国に専修念仏の御教えを拡げる決意が、今日の私に何を云わんとしているのか。この混沌の現世に生きる私に、いかに生くべきかを深く問い直すことを強いるのである。そうこうしているうちに、陽も傾き、いつになく、文殊塔は高く感じられた。二十メートルほどの高さなのだが、真下に立って、法輪を見上げると、青い空がだんだんと赤み帯びてきた。そしてもう一度ふりかえると、夕やけをバックに金戒光明寺の文殊塔は建っていた。



東山山麓への道

高橋良和

先にも京都の安養寺のところで、法然上人と親鸞聖人との出会いのことを書いたように思うが、この鎌倉時代における浄土門の二人の代表的人物の出会い、今日の浄土門の繁栄の大きな力となったことは、いうまでもない。

ところでこの親鸞聖人が、法然上人を訪ねるにいたった動機というのは、如何なる機会であつたのだろうか、

比叡山における法然上人の足跡は、割合いはつきりしているのに、親鸞聖人のそれは、あまり明瞭でない。

西塔に聖光院という寺がある。然し堂宇はなく、その寺は山麓の阪本に移つて現在星光

院となっているが、その昔の聖光院が親鸞聖人修行の地といわれ、そこに石柱が建てられている。

それと東塔の無動寺がその修行の地ともいわれ、そこに親鸞聖人の身替りになつたという、そば食い木像が安置されているが、これは伝説的なものである。

親鸞聖人は、比叡山での修行の当時は、堂僧であつたと伝えられているから、さほど目立つた存在ではなかつたらしい。

親鸞聖人は、範鸞と称していたが、その在山は二十年であつたようである。然し当時の比叡山は政争に明けくれている、日吉神社の御興をかついで、京都にあればにやつてき

たいわゆる僧兵のいたところであるから、親鸞聖人もなげき悲しんだらしい。その例として、正像末和讃のなかに、晩年愚禿の「悲しみなげき」として、

この世の本寺末寺のいみじき僧とまふすもうきことなり。

と比叡山時代のことを述懐していることでもよくわかるのである。

期待しながら登山した比叡山で、期待したものを得られなくなつて親鸞聖人は、比叡山を下山する決意をしたのであるが、その間京都の六角堂に参籠して、後世を待つてゐる。

親鸞聖人は、この六角堂の救世観音に百日の参籠をしたとき、その九十五日目の晩に、

聖德太子が示現し、法然上人のもとに赴くことになる。

そのときの様子を親鸞の娘である覚信尼の書状によると、

山ちいでて六角堂にこもらせ給て、後世をいのらせ給けるに、九十五日のあかつき、聖德太子の文をむすびて、示現にあづからせ給て候ければ、やがてそのあかつきでさせ給て、後世のたすからん縁にあいまいらせて、法然上人にあいまつらせて、とある。

このなかにある聖德太子の文というのは、その内容が明らかでない。親鸞聖人が妻帯していることについての文であるようにも想像出来るが、要はこの文によって、法然上人のもとに赴き、入門することになるのである。

当時法然上人は、京都東山の山麓、吉水の庵室にいたときであり、今の円山公園安養寺がその庵室の名残りであるといわれている。

法然上人六十九才、親鸞聖人二十九才のときであるから、法然上人の晩年のときである。親鸞絵伝の文をみると、

真宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつ

くし、教の理致をきわめて、これを述べたもうに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の真心を決定したといっている。

このことからすると、如何に親鸞聖人が、法然上人に対して信胆し、かつ帰依したかがわかるようであって、法然上人によって自己の進む道を示してもらった親鸞聖人のよろこびはまた格別であったといえる。

それであつてこそ、

たとえ法然上人にすかせまいられなくても、という。法然上人にだまされたと思つても、念仏のおしえを信するということばを吐いているのである。

かくして法然上人のもとに入つた親鸞聖人は、その信頼感がことのほか深く、三十三才のときに、法然上人の著書である、選択本願念仏集の書写を許されたとある。

そればかりか、範鸞といった親鸞聖人が、

法然上人から禪空という名をもらひ、また法然上人の像を画いた際、上人から往生礼讃の文を書かれたものをいただいたとつたえられ

おそらくこれは、法然上人のおしえの真髓を相承したということであろう。

この当時、東山一帯に念仏聖といわれる人々の集団があり、念仏聖が町に出て、大衆救済の念仏門を結ったときであるので、親鸞の入門は、この集団に大きな波紋をあてたことであろうと思う。

親鸞のそのときの感懐を恵信尼の書状をみると、

上人のわたらせたまわんところには、人はいかに申せ、たとえ惡道にわたらせ給うべしと申すとも。

と記している。考えてみると、鎌倉仏教の巨聖であるこの法然上人と、親鸞聖人との出会いほどすばらしい出会いはないといえる。

六十九才といえ、人間的にみても思想の円熟した年である。そして一方、親鸞聖人苦悩に浮沈する若い時代である。

なんだか親鸞の苦悩がそのまま今日の人間に通じるように思えてならない。

東山の円山公園のあの東ぎわの安養寺を訪ねると、親鸞が道学に、法然上人のもとにいそぐ姿が、臉によみがえってくる。

浄土宗の国宝

三河大恩寺の山門

大恩寺の名はあまり知られていない。御津山浄土真院と号し、古来より浄土宗三河三本山の一つに挙げられた由緒ある寺である。室町末期の創立で開山は了暁慶喜、二代肇誉訓公代に発展し松平親忠の帰依をも得た。江戸時代には牧野一門・菩提所として発展し、東三河に五十余の末寺・塔頭を支配、朱印地百石を領した別格寺であった。

東海道線愛知御津駅より北へ約五〇〇メートル御津山の麓に位置している。都会的な雰囲気はない。静かな町並を横切り、左に御津山を右に田園をみながら約五分程ゆくと前方に御津神社がみえる。大恩寺はこの神社の左、こんもりとした繁林の中に位置している。総門を通り抜けると白壁の山道が続く、こんもりとした樹林と対称的に、しっとり

落着く中程より、なだらかな石段になり登りおわった処に山門が佳麗な姿をみせている。知恩院宮門跡第六代尊超法親王梁筆による「浄土真院」の山門額がひとときわ目につく。三河湾の塩風や湿気のためか一層古めかしさを程している。

寛文十二年（一六七二）十二月、大檀那大垣城主戸田采女正が建立したもの、間口四間一尺五寸、奥行二間半と形は小さいが均衡のとれた山門である。京都の知恩院や南禅寺の山門と同形式のもので唐様和様の折衷からなる工法がみられる。楼上内部には戸田采女正寄進の上品阿弥陀如来を正面に左右に十六羅漢が安置されている。本堂と比べて雄荘・荘厳なる光景は程していないが、むしろこうした山地には簡素な山門の方が自然になごむ思いがする。昭和二十九年二月五日重要文化財に指定された。当寺には、他にも室町時代の建造物阿弥陀堂・観経説相王宮曼陀羅などの国宝重要文化財が多く蔵されている。

（佐々木洋之）



大恩寺山門

寛文十二年大垣城主
戸田妥女正の建立

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
(送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円
(送料 不要)

浄土 九月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年八月二十五日 印刷
昭和四十八年九月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

絵伝『法然上人』

かねて若い世代にむけての伝道文書をとの声しきりでしたが、このたび開宗八百年記念出版として、勅修御伝にのつとつた新しい感覚の絵伝『法然上人』が発行となりました。

青少年はもとより、博い層にわたる檀信徒方への施本として、開八慶讃法要などの機にご利用頂きますれば幸甚です。

B5・変形版 (タテ20cm × ヨコ22cm) 24頁

定価	180 円	〒 80円
50冊以下	単価 180 円	送料実費
50冊以上	" 170 円	
100冊以上	" 160 円	} 送料無料
200冊以上	" 150 円	
500冊以上	" 140 円	
1000冊以上	" 135 円	

京都市東山区林下町
発行所 浄土宗宗務庁

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 160 円 (〒 70円)
(200部以上 単価140 円 送料実費)

内 容

- 第一編 法然上人のあゆみ
- 第二編 浄土宗のおしえ
- 第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

TEL (03) 262-5944 番 振替東京 82187